

2022 年度春号 研究室だより

卒業生、修了生の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

2021 年度の西洋史学研究室の近況をご報告させていただきます。

今年度は、昨年度に続き新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大の影響に左右されながらも、西洋史学研究室でもオンラインの活用や一部対面授業の再開、感染予防の徹底など、目まぐるしく変わる新しい環境に適応しようと尽力してまいりました。

教員スタッフに関しましては、岡崎敦教授（フランス中世史・アーカイブズ学・資料学）、今井宏昌講師（ドイツ現代史）に加え、非常勤講師として学内より野々村淑子先生（教育文化史）、学外より福岡大学の森丈夫先生（アメリカ植民地時代史）をお招きしました。また、昨年度延期となった静岡県立大学の剣持久木先生（フランス現代史・公共史）による集中講義も無事開講され、名護屋城博物館への見学を含めた対面での授業が、感染対策に留意しながら実施されました。

学部生に関しては 2018 年度、2019 年度、2020 年度に続いて、アン・スンヒョン、安達漱也、井上千遥、柏木砂弥香、松扉和人、遠山恵、野中諒、山口恒星、山口竣平、吉田美咲、以上、定員一杯となる一〇名の学生が進学してきました。また大学院修士課程には高橋毅、中島充祥、松口優花が、博士課程には、修士論文で人文科学府長賞を受賞した平田哲也が進学しました。また、研究室にアルコール消毒や体温計を設置するなど感染対策を強化していく中で、少しずつではありますが、昨年度に比べ、研究室や授業にて学生同士が直接交流する機会も増え、さらに賑やかさを増した研究室となっています。

また夏の恒例行事となっているオープンキャンパスも、昨年度同様、全面オンラインで開催されました。本研究室では昨年度に続き、学生有志の手で紹介動画を作成し、YouTube にアップロードしました。次の URL から視聴可能ですので、ぜひともご覧ください。

<https://youtu.be/7ofRT-EPhaY>

本研究室にかかわる学会・研究会につきましても、コロナ禍の影響で、対面での活動を制限せざるを得ない状況が続いています。そうした中、今年度は多数の学会・研究会をオンラインで開催することができました。四月に開催された九州西洋史学会 2021 年度春季大会では、今井先生が「遠隔がつなぐ高大連携：コロナ禍におけるグローバルな歴史実践をめざして」と題する報告をされました。九州西洋史学会若手部会では、高橋を中心として、八月に「歴史教育に関する読書会」が企画され、全国各地から多数の学生が参加するなど大いに盛り上がりました。また 11 月には、岡崎先生を中心に、21 世紀の新しい資料・情報管理を、その管理の場、およびそれを担う司書・アーキビストといった専門職の人材養成（キャリア形成）の観点から再検討するという意図のもと、シ

ンポジウム「資料・情報資源管理組織のミッションと専門職人材」が九州大学中央図書館にて開催されました。12月には1年ぶりとなる2021年度九州史学会西洋史部会が開催され、高橋毅と松口優花による報告も行われました。

学生・院生による学術活動も活発化しており、8月には松口が日韓次世代学術フォーラム第一八回国際学術大会で報告を行いました。さらに今年度は、学内の「ジェンダー研究に取り組む学生への研究助成プログラム」に三名が採択されました。

以上、簡単ながら今年度の西洋史学研究室の近況をご報告致しました。大変な状況ではありますが、卒業生・修了生の皆様のご健勝、ならびに益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

(松口優花)

会員近著

田中孝千代『同じ時代の風をうけながら：アジアの中で、現在・過去・そして日本の法的責任を考える』牧歌社 二〇二一年